

三井のリフォーム住生活研究所 所長 西田 恭子

## 学生が考える 将来の親との暮らし方

大学で「住宅リフォーム計画」の授業を受け持っているが、前期授業も今日が最後という時、女子学生に両親を意識した暮らし方について質問してみた。

「将来結婚し、世帯を持ったときの親との距離をどう考えるか？」

「完全同居二世帯型・完全分離二世帯型・隣居型・近居型・遠居型」と、だんだん二世帯の距離が広がる分けかたで答えてもらった。

完全同居型
完全分離型
隣居型
近居型
遠居型

一三〇名ほどの学生に聞いたのだが、一位は近居型希望で全体の六七%をしめた。二位は隣居型だが一八%、三位は遠居型で一三%と、断りに近居型希望が多かった。

「どうやら私の授業内容の影響も受けているとは思

もの、その理由を聞いてみるとなかなかこれが面白い。

「近居がいいです。今、母方の祖母と近居しているのですが、良好関係だからです。完全同居の祖母もいるのですが、近居の祖母の方がほどよい距離感です」。

「もし夫の親がとも親切で心を開けるような方だったら、近くに任んで交流するのも良いと考えます。近くに任んでいれば、夫のことを色々聞くこともできますし、生活に困ったこと

が出た場合に、アドバイスを頂くこともできます。中には「いつでもすぐ来られてしまう隣居ではなく、たまに車で来られるぐ

らしい距離がちょうどいいと思います。いつも一緒だったり、気配を感じたりするのは、お互い嫌だと思

うからです」というのもあった。すべて本音の答えだろう。

世帯型を希望する人が六名だけいた。その理由の中に、「自分の親が面白いから一

緒に暮らしたい。自分が仕事をしながら子供を育てたいので、子供をみてもらいたい。親もそれを望んでいるし、実現しよう。五〇代の親、二〇代の私、赤ちゃんとという二〇歳位ずつの差がある世代で暮らすと、たくさん知恵を吸収出来る」というのがあった。

そうか、親も面白くなくてはいけないのだ。ついつい立派な親でいようと思っ

て頑張ってきた方には、若干肩透かしなのではないだろうか。人が集まり暮らすには、楽しくなくてはいけないのである。冗談の通じる相手であり、笑いあえる相手であってこそ、同居ができるのだろう。知恵と経験だけを振りかざすのではなく、人生の楽しみ方を伝授できることが、子世帯との関係を良くするのかもしれない。

その同居希望の六名がみんな結婚相手の親ではなく、自分の親をイメージしているのだが、これも自然の流れであろう。



西田恭子氏のプロフィール  
一級建築士。「三井のリフォーム」で設計を手かけ二五年。暮らしの創造に貢献する「三井のリフォーム住生活研究所」の所長に就任。新聞・雑誌・書籍の執筆、各種セミナーで講演を行う。文化女子大学非常勤講師。日本女子大学住居学科卒。